

鹿児島大学高隈演習林地域開放事業におけるアンケート調査報告

松元 正美・野下 治巳

(農学部附属演習林)

はじめに

地球環境問題の多くが森林に関わる問題であり、国民の意識の高まりとともに、森林を舞台にしたさまざまなタイプの教育需要を生み出している。また小中学校においては「総合学習」が導入され、環境教育・野外教育を志向し、実践するところが増えている。

高隈演習林には3000ヘクタールにおよぶ広大な森林があり、これまで農学部の森林・林業に関する教育研究の場として利用されてきたが、近年の森林をとりまく状況から、一般市民や子どもたちを対象にした森林教育の場としての利用も、これからの大学演習林のあるべき姿の一つとして重要なものと考えらる。

本報告は平成11年度から実施している子どもを対象にした地域開放事業「森と遊ぼう」についての紹介と、参加した子ども達と保護者からのアンケート調査について報告し、その特徴と今後の課題について検討する。

森と遊ぼう

文部省が一昨年から推進した事業の一つに「大学等地域開放特別事業」がある。小中学校の完全週休二日制導入を前に、休日の有効利用を目的とした「全国子どもプラン」の一つとして、大学施設に子どもを対象とした開放プランを呼びかけたものである。そこで鹿児島大学高隈演習林では、小学生を対象とした企画「森と遊ぼう」を立案し、一昨年2回、昨年3回、今年度3回実施した。

実施内容を表1に示す。この企画は、遊びの中から子どもたちに森林のさまざまな側面を体験してもらい、森林がいかにふだんの生活の中に密着しているかを理解し、豊かな情緒を育んでもらうことをねらいとした。対象は小学校4～6年生とその保護者で、新聞への案内掲載と学校へのポスター配布等により参加者を公募した。参加者の大部分は新聞から情報を得ており、ほぼ予定通りの期間内に募集人員に達する申し込みがあった。

内容は、シラス洞窟の探検、自然の蔓を使ったターザン遊び、沢登り、水源地（湧水）の探査、植物採集、キャンプ、林業体験など多岐に渡っている。演習林の豊富な素材を生かし、楽しく、かつ勉強になるものを目指し、演習林の職員による手作りの企画内容であり、子どもたちが安全に楽しく一日を過ごせるように念入りに準備して行った。参加者からの反応も良好であり、アンケート調査では、ほとんどの参加者から「非常に楽しかった」「次回も是非来たい」という回答をいただいた。

これまでの子供開放事業のなかで特筆すべきこととして、このような子どもを対象とした企画を大学教育の中に取り入れることを検討した。すなわち子どもを対象とした森林教育の指導者養成のためのプログラムである。平成12年度に、農学部森林科学コースの学生有志の自発的な活動により、「森と遊ぼう」の第2回「森でくらそう」を全面的に運営した。学生は学ぶ立場から教える立場になり、初めは戸惑いもあったが、学生達のやる気と見事なチームワークによって企画を成功させ、大学教育の新たな可能性をきり開いた貴重な足跡となった。この実績をもとに平成13年度からは「森林教育入門講座」が正式な大学のカリキュラムとしてスタートした。この授業は森林科学コース3年生を対象としてあり、本年度は「森と遊ぼう」の第2回「森アドベンチャー」を企画運営した。今後もこのような学生達による企画には、おおいに演習林としても協力し、これからの森林教育を担う指導者として育ててほしいものである。

参加者の動向

表2および表3に森と遊ぼう参加者の居住地別内訳と学年別内訳を示した。参加者の募集は、11年度は新聞への案内掲載、12年度からは新聞のほかに学校へのポスター配布（鹿児島市と演習林近隣市町村の小学校）によった。参加者の居住地内訳をみると、初年度は鹿児島市からが大部分で、地元垂水市と隣接する鹿屋市からの参加者はわずかであった。一般に大都市の居住者の方が森林レクリエーションに対する需要が高いため、新聞での宣伝は鹿児島市の住民に対して効

果的であったと思われる。一方12年度からは地元2市やその他の市町村からの参加者が増加した。学校に配布したポスターや、初年度の企画の新聞記事などにより、演習林周辺の市町村住民に対しても宣伝効果があったものと思われる。参加者の学年別内訳では4年生が最も多かった。保護者の参加も毎回10人近くあり、主に4年生と保護者が親子でレクリエーションを楽しむ傾向が見られた。

今後の課題

今回、このような企画を通じて思ったことは、これらは通常の学校教育ではできないものであり、広大な森林と、その恩恵としていたるところから湧き出る湧水や、そこを源に流れ出る川など、「演習林は森林教育の無限の可能性を持つ教室である」と実感している。それは「こどもたちへの森林教育の担い手」であるとともに、「森林教育指導者養成の担い手」という二つの側面をもつ。これらを今後さらに発展させていくために、以下の3つを今後の課題にしたい。

①教育効果の評価。この企画の参加者や運営に携わった学生にとってどのような教育効果があったのかを客観的に評価する必要がある。教育学的な面からのアプローチが必要である。②教育プログラムの開発と検討。こどもを対象にした新しい森林教育プログラムと、学生を対象にした森林教育指導者養成プログラムの開発が必要である。上記の評価をもとに教育学的な観点からの「教育効果のある」プログラムを再検討したい。③演習林業務の転換。演習林職員は従来の演習林業務に加えて、インストラクターとしての役割がこれまで以上に求められることになる。その役割を果たすためには、演習林業務の転換を図るとともに、職員個人の技量を高めるための努力も必要となろう。

表1 森と遊ぼう実施内容

年度	回	タイトル	期日	参加人数	内 容
1999	1	森のたんけんたい	9/11	27	ターザン遊び・洞窟探検・沢登り・水源地探査
	2	秋のめぐみをさがそう	11/13	30	木の葉、木の実集め・山イモ掘り・イモ鍋作り・工作
2000	1	川のたんけんたい	8/19	33	ターザン遊び・沢登り・川遊び
	2	森でくらそう	9/9-10	15	キャンプ生活・ターザン遊び・沢登り・川遊び
	3	木こりにチャレンジ	11/25	39	植栽・枝打ち・間伐体験
2001	1	川のたんけんたい	7/28	28	ターザン遊び・沢登り・水源地探査
	2	森アドベンチャー	8/23-24	20	キャンプ生活・ターザン遊び・沢登り・オリエンテーリング
	3	木こりチャレンジ	11/10	21	植栽地見学・竹林見学・枝打ち体験・間伐体験

表2 森と遊ぼう参加者の居住地別内訳

	1999年度		2000年度			2001年度		
	第1回	第2回	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回
鹿児島市	22	23	11	10	19	15	10	11
垂水市	1	2	9	1	5	7	5	1
鹿屋市	0	0	3	1	1	0	0	0
その他	4	5	10	3	14	6	5	9
合計	27	30	33	15	39	28	20	21

表3 森と遊ぼう参加者の学年別内訳

	1999年度		2000年度			2001年度		
	第1回	第2回	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回
6年生	3	1	8	1	7	5	5	2
5年生	2	5	9	5	9	3	7	6
4年生	10	15	6	9	12	8	8	6
その他	2	2	2	0	3	5	0	4
保護者	10	7	8	0	8	7	0	3
合計	27	30	33	15	39	28	20	21